

Book Review 37-1 AI #有罪、と AI は告げた

『#有罪、と AI は告げた』（中山七里著）を読んでみた。
著者は第8回「このミステリーがすごい！」大賞で大賞を受賞。その後、多数のミステリーを執筆。

AI は、読み込まれた過去の情報を統合して、人間よりも速く正確に結論を出す。しかしながら、倫理が絡む問題に導入できるかが、本書の問いかけである。先の Book Review 36-3 #テロでも述べたが、何をどう読み込ませるかによって答えが違ってくるのである（例えば、トロッコ問題、戦争犯罪、文化的背景の違い）。

裁判官は日々の業務に忙殺されている（公判、証人尋問、証拠や鑑定書の読み込み、判例等の抽出、判決文作成、等）。そんな時、新人裁判官 T に、中国から売り込まれた「AI 裁判官〈法神 2〉」の性能を検証するという任務が舞い込んだ。過去の裁判記録を入力すると、AI 裁判官は一瞬で判決文を作成し、人間裁判官のものと遜色なく、判決は人間が下したものと全く同じだった。これなら導入すれば、業務の効率化が全国の裁判官にとって福音となる。

そんなある日、T は 18 歳少年が父親を刺殺した事件を担当することになる。年齢、犯行様態から判断は難しいが、これまでの判例からすると死刑にはならないだろうと考えられたが、試しに公判前に AI 裁判官にデータを入力し、出力された判決は死刑であった。AI 裁判官は罪を数値化して判断を下す。このまま裁判が進行し、18 歳の少年は死刑となるのか。裁判官の倫理と英知、正義とは何かを考えさせられる作品である。

ここで一つの教訓を紹介したい。ベトナム戦争における「マクナマラの誤謬」というものである。マクナマラ氏は天才と謳われ、ベトナム戦争の最高責任者になった。彼の戦況を見極める尺度は、敵兵の死者数「ボディカウント」である。敵兵のボディカウントを増やすことで、いずれ敵兵が枯渇し、戦争が継続できないポイントに早期に達するはずだと計算した。そしてその目標は早晩達成された。にもかかわらず周知のように米軍は敗北し、ベトナムの地を追われた。何が間違えであったのか。数値化できないものを排除していたからである（数値化できるものだけを重視した）。実は米軍の兵士が予想以上に戦場から逃避し、一方ベトナム軍では兵士が死亡するとその妻や息子が愛国心に燃えて次々に参加したからであった。

何の世界でも数値（IQ や学力といったテストなどで評価している認知能力）で評価されがちであるが、それ以上に非認知能力（non-cognitive skills）が重要なのである。物事に対する考え方、取り組む姿勢、行動などが、日常生活・社会活動において重要な影響を及ぼすのである。これを Negative Capability（詩人 John Keats の言葉）という人もいる。事実や理由を性急に求めず、不確かさ、未解決の状態を受けいれる能力、どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力である。NHK の番組（バタフライ・エフェクト）ではモヤモヤ力、共感力と言っていた。Negative Capability については作家の帯木蓬生氏が『#ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』という書籍を出しているので参考にされたい。